２０２４年５月１９日聖霊降臨日説教

イザヤ書 44 章 1-8 節
使徒言行録 2 章 1-11 節
ヨハネによる福音書 20 章 19-23 節

本日は、教会の三大祝日の一つ、聖霊降臨日です。わたしたちの教会にとっては、１３５回目の創立記念日でもあります。いまだコロナ禍の影響は残っておりますが、装いを新しくした聖堂とともに、これからも皆さまと礼拝と祈りを捧げ、また様々な活動を盛んにしていきたいと思います。

本日の旧約日課は、イザヤ書です。本日の箇所は、４０章から始まるいわゆる第二イザヤに含まれます。４０章１節は、「**慰めよ、慰めよ、私の民を**」という有名な言葉で始まり、４２章１から４節は、「主の僕」という人物について初めて触れられます。第二イザヤは、全体として、バビロン捕囚という破滅的出来事からのイスラエルの回復について語っているのですが、４２章１８節から２５節には、主なる神様の声に耳を傾けなかった、イスラエルの人々に対する批判があります。しかし、批判で終わることなく、「**しかし、ヤコブよ、あなたを創造された方、イスラエルよ、あなたを形づくられた方主は今こう言われる、恐れるな。私があなたを贖った。私はあなたの名を呼んだ。あなたは私のもの**」（イザヤ 43：1）と、主なる神様がイスラエルを創造されたこと、破滅から贖われたこと、これからも導き守ることを語ります。

本日の日課の箇所も、同じように、４３章２２節から２８節で、イスラエルが主なる神様を疲れさせるほど背いたことを語りつつ、しかし、その批判で終わることなく、「**しかし今、聞け、私の僕ヤコブよ、私が選んだイスラエルよ**」（イザヤ 44：1～2）と慰めと励ましの言葉が続くのです。「**あなたを造り母の胎にいる時からあなたを形づくり、あなたを助ける主はこう言われる。恐れるな、私の僕ヤコブよ。私が選んだエシュルンよ。**」（イザヤ 44：2）では、イスラエルという存在が、その最初から主なる神様によるものであることが、人間の誕生にたとえて確認されます。イスラエルは、主なる神様の選びによって誕生したことが確認されるのです。「ヤコブ」も「エシュルン」もイスラエルの別の呼び方です。

３節から４節では、植物をたとえとして、その選ばれたイスラエルが、自らの力で、あるいは自然に成長したのではなく、主なる神様が「**乾いた所、乾燥した土地**」すなわち本来は成長が困難な土地に、恵みを与えたからこそ育ったことが示されます。そして、その恵みは「**私はあなたの子孫に私の霊を、あなたの末裔に私の祝福を注ぐ**」（イザヤ 44：3）とある通り、過去に対するだけではなく、未来にも向けられるのです。この箇所にある「私の霊」は、「私の息」と訳しても構いません。また、この部分があるから、本日、聖霊降臨日の聖書日課として選ばれたといえるでしょう。イスラエルも教会も、良い意味で、主なる神様の息のかかった存在なのです。「ポプラ」は、新共同訳では「柳」と訳されていました。どちらに訳すかは解釈によるのですが、「ポプラ」と「柳」では、成長した後のイメージがかなり異なります。

聖書協会共同訳は、この箇所が言おうとしているのは、湿地で優しく丸く育った柳ではなく、急激に強く高く育ったイメージの「ポプラ」のがふさわしいとして、それを採用したのかもしれません。５節は、イスラエルの人々が、イスラエルであることを自覚する方法の一部が描かれています。

６節からは、主なる神様が、どのような存在であるかについて、改めて提示されます。それは、「**イスラエルの王なる主**」であり、「**イスラエルを贖う方**」であり、「**万軍の主**」です。そして、「**私は初めであり、終わりである。私のほかに神はいない**」方なのです。主なる神様が「**初めであり、終わりである**」方、これは教会の信仰の言葉としてよく言われる表現ですが、『聖書（旧約）』においては、多くありません。同じイザヤ書の４８章１２節と４１章４節（少し表現が異なる）ぐらいです。主なる神様は、すべての初めからおられることを前提としているのが『聖書』ですから、改めてそう語る表現する必要はなかったのかもしれませんが、ここでは改めてそれが語られます。主なる神様は時間を超えた方なのです。

６節の最後「**私のほかに神はない**」から、８節の「**私のほかに神があろうか、私のほかに岩があろうか。私はそれを知らない**」まで、主なる神様の唯一性が語られます。これらの言葉は、宗教的・文化的排他性を示しているように思えます。しかし、そうではありません。なぜならば、ここが示している事柄は、イスラエルを人間存在の代表として、人間が人間の作り上げた偶像を信仰してしまうこと、そこにある自分の願望偏重の方向性、それらがもたらす罪と破滅について警告しているからです。そして、その破滅からの解決の方法として、主なる神様への信仰を示しているからです。

様々この世の出来事を概観するとき、現実的には、唯一の神的存在を信じるからこそ、自己中心的になる場合があります。あるいはそのように信じる集団が、破壊と悲劇を引き起こす場合もあります。しかし、この箇所が示す事柄は、それらの自己中心性や他者破壊を起こす信仰も、自らの思いや願望を信じる信仰に過ぎないことを示しているのです。

本日は、聖霊降臨日・教会創立記念日です。さきほど、主なる神様を（直接）主と信じるイスラエルもイエス様を通して主と信じる教会も、神様の息のかかった集団、聖霊が吹いたからこそ存在する集団であると語りました。この聖霊がなければ、イスラエルも教会も、人間が作り出すほかの文化的営みや集団と同じになってしまいます。そして、そこで示される希望や励ましは、人間的思いを超えることはないのです。つまり、主なる神様が、教会をたて、わたしたちに対して、また、わたしたちを通して社会に示そうとする、まことの希望や励ましではないのです。

本日は、聖霊に満たされるからこそ、教会が教会で在りうること、わたしたち一人ひとりに、まことの守りと慰めと励ましがあること、この当然の事柄を、あらためて確認したいと思います。そして、これからもその確認を可能とするのが、いまわたしたちが行っている礼拝と祈りです。そのわたしたちのなすべきつとめを、これからも与えられた聖堂を通して、続けていきたいと思います。